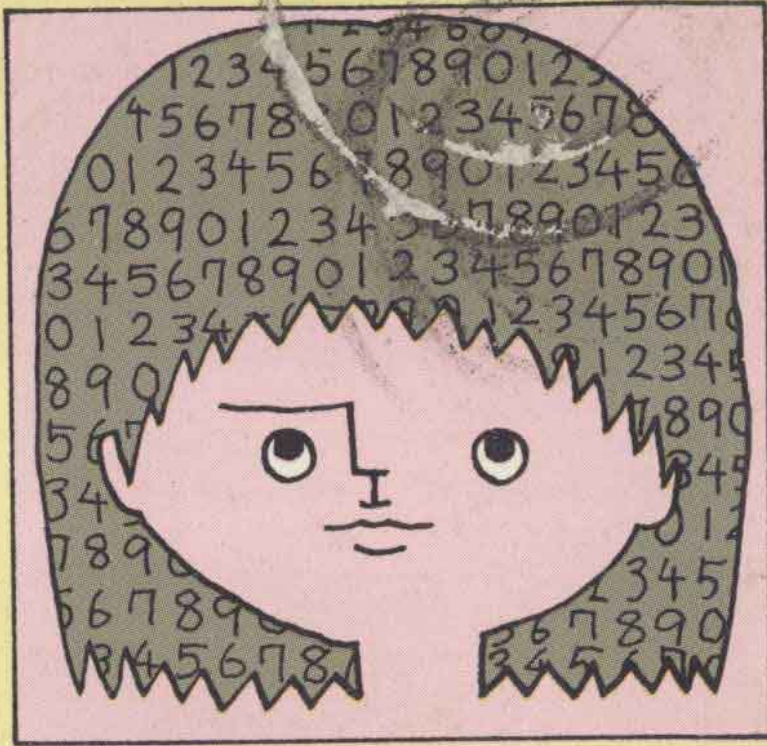


中山千夏



偏見レポ。ト



文春文庫

定価はカバーに表示してあります

中山千夏・偏見レポート

203-1

1978年9月25日 第1刷

著者 中山千夏

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3 丁102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文春文庫

中山千夏・偏見レポート



文藝春秋

中山千夏・偏見レポート

目次

A 若者について 7

新聞や雑誌に連載されたもの三種を集めた。最初のは、中学生用テキスト（それも数学や英語の！）に連載したやつで、詩なんかもあるし、私、オトナぶってるし、少し恥ずかしいのです。次のも若者向けに書いたので恥ずかしい。つまり、若者について話すって、恥ずかしいことなのです。

B うちそとさまさまについて 77

うち、とは私自身のこと。正月。悪趣味。土人の懊惱。胃。若者の怒り。紅ホテル物語。酒日記。三つの出会い。味覚。少女期。がらん堂。蛇について。そと、とは私の目で見たと世間のこと。テレビの私とこの私と。抜け殻に用はないのだ。考えさせられるといういやな言葉。近頃何か腹の立つことありませんか。ハモル、ハモッタ、ハモラナイ。自分の写真が新聞広告にのる時。孤独な人にふさわしく甘味抜きでいおう。テレビの腸のなかで考えたこと。

C 男と女について 143

男と女の話はとっても難しいから大っ嫌いなのに年中頭から離れないのは、私が矛盾だらけで散漫で見栄っぱりで自己中心的でお天気屋で残酷でケチで単純で鈍感でヤジ馬根性一杯でオセッカイで依頼心が強くなって出しゃばりで、そのくせ口数のへらない女族の一員だからでしょう。

D 姑の死について 163

紅陽院揮法妙光大姉。私のお姑さんの戒名です。『文藝春秋』に載った時には「私の姑は初代OL」という題でした。でも、あまり話し合う機会もないままに死んでしまったお姑さんに捧げる意味で、こんなふうに変更します。

E 青森市小館地区住民の闘いについて 179

におえる王国、は『話の特集』に連載、それは「中山千夏のひきうけたページ」という企画で、毎月いろいろなレポートなんかを書くつもりだったんだけど、この問題、あまりにもものすごく、驚きかつ呆れ激怒しながら、ついつい一年間にわたる長期レポートになってしまったのです。

本文イラストレーション

本文写真

中山千夏
佐藤允彦

A

若者について

私

は二十三歳である。若者の内に入るのだろうか。落語など聞くと、「二十三、四のいい年増が横丁を曲ってったン」なんて云うことがあるから、昔流に云うと、もう年増だ。情無い。しかし、新聞など読むと、「青年実業家某氏（三十三歳）は」などと書いてあることがある。三十三歳で青年なら、二十三歳は立派な若者だろう。年齢的な区分けをするならば、どうやら私は現代における若者の末端に位置しているらしい。しかし、考えてみると、どうも私は「若者」という言葉とは縁の薄い若者時代を過ごしてきたようである。自分が若者という集合の一分子であるなどと感じたことは無かったし、今だって、「若者の代表として」などというインタビューをされると大変奇異な感じにうたれる。

私は一人っ子として、大人に囲まれて育った。その上、早くから世間に出ていたものだから、余計なことを知り過ぎていた。知り過ぎた若者は、同年齢の何も知らない若者たちと、すんなり溶けあうことができない。学校の友だちとのつきあいも、ある限度を越えることなく終わってしまった。限度とは、知り過ぎている者と知らない者との間に横たわる壁である。何も知らない若者に、私の身の上を察知することなど到底無理だったろうし、私とて、知ってしまったことを忘れてしまうのは不可能だった。そんな風だったから、私は「我ら若者」という感じで自分と仲間とを認識する機会を持たないままに成人してしまったのである。私にとって「若者たち」は「大人たち」と同じように縁の薄い集団だったのだ。そんな若者時代を過ごして来たせいかどうかは知らないが、私は若者が好きではない。どちらかという嫌いだ。

若者は、傷つき易いから嫌いである。傷つき易い、という自己の弱さを隠す為に、すぐに相手

にかみついて、他人を傷つけるから嫌いである。そして、自分の傷ばかりを撫でているから嫌いである。とは云っても、それは私が「若者」という言葉の中に、ある典型的なイメージを持ち、嫌っているだけの話だ。

本当の「若者」とは何なのか、そして、私と「若者」とは、どういう線で結びつくのかということになると、簡単に答は出て来ない。出て来なくてもいいのではなからうか。

そう「若者」を意識する必要はない。若者であろうが「老人」であろうが、今、生きているという事に変わりはない。次の瞬間は死かもしれない、ということにも変わりはない。私なりに生きるまでである。

夢

と若者。よく一緒に出てくる言葉である。

——君の夢は何か。

と、若者は問われる。

——おい、夢を持って、夢を。

と、若者は励まされる。

若者と夢とは、切っても切れない関係のようである。しかし、本当に若者は夢を持つべきなのだろうか。ちょっと考えてみる必要がある。まず、夢とは何か。

①眠っている時、実際のように、いろいろのものごとを経験する現象。

②はかないこと。たのみにならないこと。

③まよい。

④実現はむずかしいが、将来、やりたいと思うこと（がら）。（金田一京助編 国語辞典）

夢とは、こんなに頼りないものなのだ。若者が、こんなに脆いものをかかえて、うろうろしていいものだろうか。私はいやだ。地球は、意外に速くまわっている。

若者に夢はいらぬ、と私は考える。若者にいるのは目的と計画であろう。

例えば、①実現はむずかしいが、将来、やりたいと思うこと（がら）——を持っているとしてよ。これに、夢、というはかない名を与えてはいけぬ。実現が難しかろうが易しかろうが、将来やりたいと思うことは、若者にとって、すべて目的である。必ず実現しなければならぬ目的である。ごく現実的に綿密な計画を立て、ていねいに実践してゆけば、いつか実現するはずのものなのである。

そうやって人間は、海を渡り、新しい土地を開き、空を飛び、月にまで到ったのではなかったか。空を飛ぶことがいつまでも夢にとどまっていたならば、人間はいつまでも、ただ空を見上げていなければならなかつたらう。計画のともなわぬ目的は夢と呼ばれても仕方がない。しかし、途方もない目的をすぐ夢で片づけることはない。

オトナは、若者が途方もない目的を持つと、「現実的になれ」と云って目的を諦めさせようとする。たしかに、現実的になることは必要だ。しかし、目的を諦めるために現実的になるのではなく、目的を達成するための計画を立て、それを実践するために現実的になる必要があるのだ。

例えば「自由を得る」という目的の為には、どういふ計画を立てて実践するのが一番よいのか。学校を止めるのか、家を出るのか、もう少し時期を待つのか、平和的にか、暴力的にか。この計画を立てる時に、現実を見極めた緻密な思考が必要とされるのだ。

ああしたい、こうしたい、と云うばかりで計画と実践のない若者よりは、念仏となえてじっとしている年寄りの方がまだましだ、と私は考えているのである。



間は、自己を確立するために、多くの他と対立しなければならぬという苛酷な運命を背負っている。しかも、やっと歩き始めたばかりの若者が真先に対立しなければならぬ相手は、こともあろうに自分の両親なのである。

親と対立する程、嫌なことではない。私も何度もやったけれど、だんだんに慣れてくるとはいえ、やっぱり嫌にかわりはない。こちらが負ければ、自分がいつまでも成長しないようで情ないし、親が負ければ、今まで自分を守って来た絶対の力である筈のものが、突然ただの人間になりさがつたようで淋しくなる。どっちに転んでも、いい気持ちはしない。だからと云って、親と対立しない訳にはゆかないのだ。まあ、たまには親と何の衝突もなく天下泰平にやってゆく人もいるかもしれないが、それは例外中の例外だろうと私は考える。自分の一生が、親のではない自分の人生である限り、親と対立しなければならぬことが必ずでてくる。そして、それは、無駄に労力を消費するだけの対立ではなく、何か得るところのある対立でなければならぬ。嫌な思いをし

てまで対立するのだから、無駄に終わるのは馬鹿馬鹿しいではないか。

よく考えれば、何事によらず、うまい方法というのがある筈だ。そこで、しばらく、「親との対立におけるうまい方法」について、深く考えをめぐらせてみたいと思うが、いかがだろう。

敵を知れ、という言葉がある。親とはそもそも何なのか、まず考えてみようではないか。親との対立が他との対立と大きく異なる一点は、情がからむ、ということである。親を他人と全く同じに考えられる程ニヒルな人間は稀であるし、いやらしいが、ここではひとまず情に棹さして流されぬよう、論理的に考えてみよう。

一、親は人間である。長所短所あわせ持っているということだ。そして時には誤りも犯す。一、親は子供を生んだ。もちろん、少なくとも現在の科学で知る限りでは、子が親を選んだ訳でもないし、親が子を選んだ訳でもない。ふたつの個性が親子という関係で結ばれるのは、これこそ何かの縁とでも云うしかない。一、親は子供よりも長く生きている。したがって世事に通じ、見かけより狡猾で戦術に長けている。一、親は子供より老けている。人間の知能は二十歳位で成長を止め、維持する努力を怠れば後退する。老けるにしたがって頭の柔軟性も乏しくなるのだ。一、親は子を知る。何しろつきあいが長いのだから始末に悪い。一、親は子を愛する。客観的に見て親にも良質悪質様々だが、ほとんどの親が盲目的に我が子を愛し、我が子に執着しているのだ。以上のようなことだと思いが、次にこれを資料として、「親との対立におけるうまい方法」を考えてみよう。

例

えば、ある若者がひとつの計画を持っているとする。中学を出たらすぐに、大工の修業を始めて、将来、いい腕の大工の親方になりたい、という計画だとしようか。ところが彼の親たちは、彼を大学までやって、しかるべき会社のサラリーマンにするつもりなのである。ここに親との対立が生ずる。

まず若者が初めに行わなければならないのは、自分の計画を徹底的に検討することだ。この計画を成就させるための現実的な方法を、抜け目なく研究する。そして、なぜ自分は進学をやめて職人になりたいのか、という事を論理的に考えてみる。自分の計画と、計画を実行したい理由とが完全なものであるという自信ができたなら、いよいよ親との話合いを開始する。

親との話合いの時の態度であるが、やはり、なるべくきちんとした態度である方がよからう。親の盲愛を利用するべく甘えてみたり、自分の意見を通す為にすごんだりすると、話に情が絡んで後々面倒なことになる。あくまで礼を守り、冷静かつ論理的に話を進めることが肝要だ。親から反対意見が出たら、注意深く聴くことも必要だ。親が誤りを犯す可能性を持っているのと同様に、自分にもその可能性はあるのである。もし親の反対意見の中に、もっともだと思われる点があったら、意地を張ってぐずぐず云ったりしてはいけません。自分の計画を再検討しなければならぬ。しかし、親の反対意見の中に、自分の計画と決意をゆるがすものが何ら発見できない時には、全力をあげて親を説得する。ここで話合いの前の計画に関する研究が効を奏する訳である。親は世事に通じているから、狡猾にあらゆる方面から若者の計画の欠点をあばき出そうとするだろう。それに対抗する為には、少なくともその計画に関する世事には通じていなければ

ばならぬ。これからの世の中は職人の方が得なのだとか、自分は大工に向いてるとかいうことを、硬い頭にも判るように気長に説く。そして、大工もサラリーマンも世間的に等価値であり、自分にとってはむしろ大工の方が価値のあるものなのだ、というところまでもってゆければしめたものである。

こうなっても諦めきれない親たちなら、多分、威圧か哀願かで彼をひきとめようとするだろう。ここで彼も感情的になってしまつては今までの努力が水の泡である。相手は論理を外れ、若者より幼い状態になっているのだ。彼は更に冷静になり親を安心させ、自分の計画に協力するように向けなければならぬ。気長で冷静であることが何よりも必要とされるのだ。

これだけの努力をしても親たちが若者を不当にはばむようならもう少し苦しいことになってくる。しかし、以上の方法をぬかりなく行えば、90%は何とかなるだろう。難しいことだが、成功を祈る。

世

の中には評論家が、うようよしている。文学評論家、社会評論家、戦争評論家、政治評論家、犯罪評論家、スポーツ評論家、芸能評論家、美容評論家、映画評論家、まだまだたくさんあるはずだ。

手許の小さな辞書で「評論」のところを引いてみると、

〔評論〕(名・他サ)批評して、論じること

とある。

批評するだけならば批評家だ。「論じる」ということが、批評家と評論家を区別している。そして、「論じる」ことの内容が最も大切なことなのである。それは、評論の対象となる事物にたずさわる人間を啓蒙し、その事物を発展させる力とならなければならぬ。行動する人間たちの旗手となって初めて、評論家と呼ばれることができるのだ。

現代の評論家の99%は偽物である。彼らは旗手でも何でもない。あげ足取りの悪意に満ちた批評家か、さもなければ脳みそ一杯につめ込んだ知識が頼りの解説者か、だ。そんな評論家がうようよしている。それだけだったってうんざりなのに、その上、肩書きのない評論家がどんどん増えていくものだから、世の中やかましくてたまらないのだ。

彼らはハイエナのようなものである。ライオンが狩を済ませてしまってから、ぞろぞろと姿を現わし、獲物を失敬しておいて、うまいのまずいのと文句まで云う。自分は何ひとつ行動してないのに、批評だけは一人前なのだ。

君が何か行動すれば、この類の評論家たちが雲霞のごとく現われて、山程ごたくを並べるだろう。行動が大きければ大きい程、彼らの声も増えるだろう。彼らのいじけた物指しでは測りきれない行動ならば、彼らは、本気で、怒りさえするかもしれない。

だが、ひるんではならぬ。彼らは確かにうるさいけれど、それだけのことである。ハイエナに、ライオンを傷つけることなど決してできはしないのである。ただの唸り声なんかには惑わされないで、君は、ひたすら自分の目で事物をみつめ、自分自身をみつめ、本当の評論家をみつつけ出し、